

書 評・紹 介

Karen Oppenheim Mason, Noriko O. Tsuya and Minja Kim Choe (eds.)

The Changing Family in Comparative Perspective: Asia and the United States

East-West Center, Honolulu, 1998, xiv + 258 pp.

本書は、1996年3月、日本大学におけるシンポジウムで報告された論文をもとにまとめられており、日本大学、米国の東西センター、韓国保健社会院の3カ国・機関の共同による「仕事と家族生活についての日韓米比較研究プロジェクト」の一環でもある。

ある事象について国間の比較を行う際は、各国の類似点、相違点を明らかにした上で行わないと、比較の意味がないことはよく言われているが、本書では、それを明らかにして比較を行っている。序章によると、儒教の価値観に基づくアジア諸国と、個人主義的価値観に基づくアメリカの家族とを比較し、産業化、都市化、その他の近代化の特徴が、家族にどのような影響を与えるか、という社会学者が持ち続けてきた問題に取り組むことを意図している。比較を通して、第1に、西欧家族の個人主義化は、近代化に寄与するのか、それとも既存の価値観によるのか、第2に、家父長制・父系家族制度、多世代家族に付随するジェンダー不平等がより強く根付いている東アジアにおいて近代化が家族に与える影響は、アメリカで見られた影響とどう違うか、第3に、人口転換の速度が異なると家族関係の変化はどう違うかなどを探ることが可能であるという。全章でこれらの問題に触れているわけではないが、全般的には問題意識を持っての比較がなされている。

本の構成は、1章が序論、2～4章が第1部（家族形成）、5～6章が第2部（夫婦家族の内部構造）、7～8章が第3部（就労が家族生活に与える影響）、9～11章が第4部（世代間関係）、12章が結論である。内容は、2章は日米韓の家族形成と解消のパターンの比較分析、3章は韓国の結婚パターンの動向、4章はアメリカの結婚の変化、5章は3カ国における就労と家事の時間配分、6章は東・東南アジア5カ国の家庭内における妻の経済決定力、7章は日韓の既婚就労女性の役割葛藤、8章は日韓の夫の飲酒と家族関係への影響、9章は韓国の世代間関係、10章は日米の世代間の触れ合いについて、11章は台湾の家族と世代間経済関係、そして12章が結論である。

3カ国の分析に用いた主なデータは、日本大学総合研究所1994年実施の「労働・家庭生活調査」、韓国保健社会研究院1994年実施の「生活の質調査」、アメリカの1987 - 88年実施のNSFHデータ（全米家族世帯調査）であるが、国別の分析の章では、他のデータも活用されている。

本書のポイントではないが、8章の夫の飲酒と家族関係の分析は新鮮である。日本の（長）労働時間を語る際、お酒の席も仕事のうち、と言われるが、その実態や家族への影響についてのデータを使っただけの比較分析は少ない。「夫が酔って帰宅する頻度」の項目のみに限られてはいても、貴重な情報であろう。

全体としては、日米韓の3カ国または内2カ国の比較以外に、1国についての章や、台湾に関する章、アジア諸国5カ国を扱った章もあり、ややまとまりのない面もあるが、それぞれの章は情報豊富で、独立し完結している。一冊の本に求めるのは不可能であろうが、読み手としては、それぞれのトピックについて各国の分析があり、さらに比較分析もされているとよかった。分析方法やまとめ方はスタンダードでわかりやすく読みやすい。特に日米韓を比較した章については、比較を目的として同時に設定された調査でないにも関わらず、ここまで深く分析されたことに敬意を表したい。（釜野さおり）